

生命倫理教育における「臨死体験」の位置づけ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 公開日: 2016-06-15 キーワード: 作成者: 小松, 奈美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/55

生命倫理教育における「臨死体験」の位置づけ

小松 奈美子

はじめに

大学における生命倫理教育の目的の一つは「患者主権の立場からの現代医学に関する考察」であり、これは看護教育や薬学教育等においては不可欠な要素である。しかし、生命倫理教育のもう一つの重要な目的は「人間存在そのものに関する考察」である。学生たちは医療者の一員となった時に多くの患者の死に遭遇することであろう。その際に、主として「患者主権に基づいた教育」を受けてきた学生が当惑するであろうことは容易に想像できる。その結果、「死」という現実は無感覚になることによって自己防衛する医療者もいるであろう。しかし、それでは医療者としては失格である。

そもそも「死」はすべての人間に訪れる。筆者のテキストも「人間は必ず死にます」という言葉で始まっている。(小松, 2005) 「死」の問題は個々人の学生にとっても重要なテーマなのである。したがって、生命倫理教育において「死」にターゲットを絞って「人間存在そのもの」について考察することは学生たちにとって非常に有意義なことであり、それは結局「よりよいケア」にもつながると考えられる。

筆者は、以上のような教育理念に基づいて生命倫理関係の授業を行っている。したがって、その講義内容も「死」に関連するものが多い。その際、肝に銘じていることは「抽象的な言葉を駆使した講義はしない」ということである。薬学生や看護学生たちに向かって哲学的言葉を多用した講義を行っても成果は少ないからである。

筆者の授業においては実際の医療現場に関係のあるビデオ教材(一般のテレビ番組を筆者自身が授業用に再編集した教材)を使用している。当然、そこでは死を目前にした人々の様々な人生模様が展開されている。現代医学を信じて最期まで病と闘う患者、尊厳死を選択する患者、現代医学以外の治療法によって病と共存する道を選ぶ患者などの姿がスクリーンに映し出されてくる。

したがって、筆者の授業においては、学生たちは現実に悩み苦しむ患者の姿を直視せざるをえないのであるが、それによって、学生たちが日ごろ無意識のうちに避けている問題が浮上してくる。それは「死」の問題である。また、人間は死の瞬間まで生きているのであるから「死までをいかに生きるか」という問題でもある。

授業ではそれらの問題を哲学的に考察するのではなく、映像に登場する様々な人間の生き様を肌で感じとることによって、学生自身の頭で「生きるとは何か?」について考察するように留意している。その結果、ある薬学部生は以下のような授業感想文を寄せている。

「薬学部に入って今までにこんな授業はありませんでした。勉強勉強の毎日でした。覚えることがいっぱい、レポート出して、テストやっつの繰り返しの日々を過ごしてきました。そんな状態に慣れてしまったけれど、今は、本当は医療人として人の生死とか倫理について

考える機会がもっともっと必要だと感じています。むしろ、今までこういう授業がなかったほうが不思議だったのかもしれない。患者さんにとって一番良い死に方(生き方)と一緒に考えていけるような医療人になりたいと思っています。そして、それは、結局、私自身の生き方にもつながってくるように思えます」

薬学教育においては知識注入型授業も必要であるが、筆者の授業のような問題提起型・自己思考型の授業もあってもいいということであろう。

本稿においては、筆者の授業における重要なテーマのひとつである「臨死体験」について概観するとともに生命倫理教育における臨死体験の位置づけについて考察する。

1. 生命倫理と臨死体験

臨死体験(Near Death Experience)とは事故や病気で死にかかった人が語る「かいまみた死後の世界」である。しかし、長期間にわたって、生還者の語る臨死体験は幻想や幻覚であり研究の価値もないと考えられてきた。

したがって、臨死体験研究の歴史も浅く、1970年代にアメリカで始まったばかりである。そもそも、アメリカにおける1970年前後は激動の時代であった。ベトナム戦争に端を発した反戦運動、公民権運動の過激化、男女同権を求める女性解放運動、大学制度改革をめざす学生運動などが盛りあがったことは周知の事実である。

以上のような社会的潮流に乗って消費者運動も活性化し、そのターゲットは医療の領域にまで拡大した。「患者もお客様である」という意識のもとに医療消費者運動が起こったのである。

そして、医療消費者運動と連動するように生命倫理(bioethics)という学問が誕生した。その結果、「患者の権利」という言葉が市民権を得るとともに、インフォームド・コンセントやQOL(Quality of Life)等が重視されるようになった。

これらの一連の動きの原因として医療環境の変化が挙げられる。1960年ごろからの医療技術の急激な進歩は不治の病に対して劇的な効果をもたらすと同時に激しい副作用も伴った。また、どの治療法を選択するかによって闘病中のQOLも大きく異なってきた。そこで、患者(お客様)は十分に説明を受けたうえで治療法(商品)を選択する必要性が生じてきた。つまり、インフォームド・コンセントが重要な意義をもってきたということである。(小松, 2003)

以上のような歴史的背景のもとに発生した「生命倫理」においては、当然、「患者の権利」、「患者の自己決定権」、「患者の自律」等という言葉が重視された。しかし、これらの言葉はあくまでも科学的現代医学を前提としたものである。

その一方で、1970年代のアメリカにおいてはもう一つの新しいムーブメントが起こっていた。それは科学的な現代医学に対するアンティテーゼとして起こった非科学的な精神世界の側面にもスポットを当てようとする動きであった。

そして、そのような動きの一環として臨死体験も注目されるようになり、それまで無視されていた臨死体験者の言葉に研究者が耳を傾けるようになったのである。

その先駆けとなった人物はレイモンド・A・ムーディであり、彼の著書『かいまみた死後の世界(Life After Life)』(1975)は世界で初めて臨死体験の諸要素を明らかにした研究書

として世界的ベストセラーとなった。

本書において、ムーディは多くの臨死体験者たちにインタビューを試みた結果、体験者の年齢・性格・宗教・職業等の相違には関係なく臨死体験の内容に驚くほどの共通性があることを明らかにしている。¹

その後、ムーディに続いて、1980年には心理学者のケネス・リングが『いまわのきわに見る死の世界(Life at Death : a scientific investigation of the near-death experience)』を世に問い、さらに、1982年に心臓病専門医・マイクル・セイボムが『「あの世」からの帰還(Recollections of Death)』を出版するに至って臨死体験研究は一気に加速した。そして、臨死体験は単に脳内現象によって惹き起こされた一時的な幻覚ではなく、死後の世界をかいま見た現実体験であるとする学説が広まっていったのである。²

2. 臨死体験の特徴

ムーディ、リング、セイボム等に端を発した臨死体験研究において取り上げられた臨死体験には共通した特徴があった。それらは①体外離脱、②トンネルのような暗闇への突入、③トンネル体験後における楽園のような心地よい世界の存在、④故人となった家族や友人たちとの出会い、⑤人生の回顧、⑥光との遭遇等である。

また、臨死体験の世界は時間・空間を超越した世界である点も共通している。たとえば、セイボムが心臓手術中の臨死体験者にインタビュー調査した際には、61人のうち29人が「自分が肉体から離れ、手術の様子を見ていた」と話しており、手術の様子を細部に至るまで詳しく説明できたということである。そして、その証言は事実とぴったり合致していた。(セイボム, 1982)

さらに、シアトルの某病院のソーシャル・ワーカーであったキンバリー・クラークはマリアという女性から以下のような体験を報告されている。

「1967年、マリアは心臓麻痺を起こして救命救急センターに運ばれた。最初は、医師が自分に蘇生処置をほどこしている様子を天井から見下ろしていた。しかし、それにも飽きてしまったので瞬時に病院の玄関に移動したが、その後は病院外に出て浮遊していた。その時、病院の3階の窓枠にテニスシューズを発見した。そして、やがて意識を回復したマリアはその事実をクラークに報告したので、半信半疑のままクラークが現場に向かいみると、確かに3階の窓枠のところにテニスシューズがあり、その色・形・状態にいたるまでマリアが語った内容と完全に一致していた。」(立花, 1994)

マリアはメキシコからの季節労働者であったのでその後の消息は不明である。したがって、マリア自身に真偽のほどを確かめることはできない。しかし、キンバリー・クラークは非常に誠実な人物であることは多くの人々が認めているところである。

この事例は「マリアのテニスシューズ」として有名な事例であり、ムーディも「脳内現象ではどうしても説明できない実例」として高く評価している。そして、ムーディは、この実例との出会いをきっかけとして「死後の世界はある」と考えるようになったという。(立花, 1994)

以上のような体外離脱の事例においてはベッド上に横たわる瀕死の身体から魂が抜け出て

瞬時に他の場所に移動している。そして、病室の天井や病院外で浮遊するのであるが、いずれの場合においても移動するための時間は必要ない。さらにドアや壁などの障害物に移動を妨げられることもない。つまり移動のための空間も必要ない。まさに、臨死体験の世界は時空を超越した世界である。

心理学者・ユングも 69 歳の時に心筋梗塞で倒れた時に以下のような臨死体験をしている (1944 年)。

「途方もないことが私の身の上で起りはじめた。私は宇宙の高みに登っていると思っていた。私の視野のなかに地球全体は入らなかったが、地球の球形はくっきりと浮かび、その輪郭は青い光に照らして銀色に輝いていた。」(ユング,1972)

これが現代の体験ならばとくに驚くことはない。しかし、ユングは、これをガガーリン以前の時点で経験しているのである。1961 年、ガガーリンが宇宙から地球を見て、「地球は青かった」というまでは、誰も宇宙から見る地球が青いことを知らなかった。したがって、ユングの証言が実際の地球の姿と酷似していたことは疑いえない事実である。

そして、ユングの臨死体験を信じるということは時空を超越した世界の存在を信じるということになる。また、その世界は人間には認識不可能な世界であり、近代哲学における認識論の祖とされるカントが「物自体(Ding an sich)」と称した世界と同質である。

カントによれば、人間の認識能力には感性と悟性という二種の認識形式がそなわっている。感性には空間と時間が含まれ、悟性には因果性などの 1 2 種類の純粹悟性概念が含まれる。そして、人間は感性と悟性にしたがって物事を認識するのであるから、この形式に適合しないものは人間には認識できない。(カント,1781) したがって、時間・空間という形式をもたないものは人間には認識不可能なのである。その意味では「物自体」は非物質的な霊魂であるとも考えられる。(小松,2012)

体外離脱体験者のパーマンも「時間と空間と形態があるのは物質界のことであり、体外離脱に代表される臨死体験の世界(非物質界)には時間も空間も存在しない」と述べている。(パーマン,2001)

したがって、臨死体験者の世界は、最終的には「信じる」しかない現象なのである。事実、カント自身、「霊魂の不死は、道徳的法則と不可分離に結合されたものとして純粹実践理性の要請である」と述べている。(カント,1788)

3. 子どもの臨死体験

臨死体験に関しては体験者の言葉を信じるかどうかという点がキーポイントになる。当然、臨死体験は体験者の虚言や妄想ではないかという疑念をもつ人々も多い。また、臨死体験以前に脳内にインプットされていた情報が影響しているのではないかと疑問視する研究者も多い。

以上のような疑問に対しては子どもの臨死体験が重要な手がかりとなる。なぜなら、子どもが嘘をついたり、何らかの先入観を持ち合わせていることは考えられないからである。

小児科医のメルヴィン・モースは多くの子どもたちの臨死体験を調査した結果、その内容が大人と酷似していたと報告している。モースがもっとも衝撃を受けたのはケイティの臨死

体験であった。

9歳の少女ケイティはプールで溺れ、瀕死の状態でもースの病院に運び込まれてきた。ICUで治療にあたった医師たちはケイティの死を確信していたが、3日後にケイティは奇跡的に覚醒した。そして元気に退院していったのであるが、退院後の診察時の状況についてモースは以下のように語っている。

「ケイティははっきりとわたしのことを覚えていた。彼女は「この人はお髭のあるほうの人よ。最初、お髭のない背の高いお医者さんが入ってきて、それからこの人が入ってきたの」と言った。確かにICUに最初に入ったのは髭のない背の高い医師だった。ケイティはほかにも覚えていて、「最初、あたしは大きな部屋にいて、それから、レントゲン検査を受けるために小さな部屋に移されたわ」、「鼻からチューブが出ていた」というように治療中の細かい点にまで正確に言及した。深い昏睡状態で目を閉じていたにもかかわらず、彼女はまわりの一部始終を「見て」いたのである。また、彼女は守護天使にも会い、天使から「ここにとどまるか、母親の元に返るか、どちらかを選びなさい」と促されたので、ケイティは戻る方を選んだ。もちろん、ケイティの母親は「守護天使のことをケイティに話したことはない」ときっぱりと断言した。つまり、ケイティが体験したことの中で、プールで溺れる以前に家族から「教えられていた」ものは何ひとつとしてなかった。」(モース,1991)

このケイティの事例をきっかけとしてモースは子どもの臨死体験研究に没頭し、多くの事実を積み重ねたうえで臨死体験の信憑性を裏付けていった。しかし、子どもの臨死体験研究によって臨死体験批判を完全に払拭できたわけではなく、実際、多数の研究者が臨死体験を徹底的に科学的見地から分析しようとした。その筆頭者がブラックモアである。

4. 臨死体験と科学的検証

ブラックモアは基本的に「臨死体験はすべて科学的・生理的に分析可能である」というスタンスに立っている。たとえば、ブラックモアは「なぜトンネルを通過し、光を見るのか」という問題については、低酸素症という解釈を打ち出した。つまり、トンネルや光は脳の酸欠によって引き起こされる幻覚であるとしている。(ブラックモア,1993) しかし、すべての臨死体験を低酸素症だけで説明できるわけではないことは明らかである。たとえば、以下のような問題点も生じてくる。

(1) 「光」の人格体

第一の問題点は「光」に関する疑問である。

たとえば、子供時代に父親から性的虐待を受けたことのある女性の臨死体験では以下のようなことが語られている。

「その光はとても温かくて心地よいものでした。そこで、私は光に"すべての人がここに来るんですか?"と尋ねた。すると、光は"そうです"と答えた。"ヒットラーも来るのですか"と聞くと、"そうです"と答えた。さらに"私の父も来るのですか?"と尋ねると、やはり、光は"そうです"と答えた。」(リング,1998)

この事例での「光」は温かく自分自身を包み込んでくれるだけではなく、自分を虐待した

人々や歴史上の極悪人物でさえ包み込んでしまうような人格性を備えていた。

この事例における「心地よさ」は脳の酸欠状態だけでは説明不十分な現象であるが、それに対して、ブラックモアは「その心地よくて幸せな気分は脳の酸欠によるのではなくエンドルフィンの分泌である」と結論づけた。(ブラックモア,1993)

エンドルフィンホルモンはモルヒネと同じような強い鎮痛作用と快感作用をもっている内因性の脳内麻薬性物質であるが、このエンドルフィンに着目して、ブラックモアは「臨死体験時に大量に分泌されるエンドルフィンが快感・歓喜・穏やかな気分・苦痛からの解放をもたらす」と説明している。(ブラックモア,1993)

以上のように、ブラックモアは光をもたらす快感等について科学的に分析したのであるが、実は、それだけでは説明できない点が残されている。それは、前述の女性が体験した「光の人格体」である。鈴木も「臨死体験における光の中心に人格を備えた人格体(being)を形成している点は重要な問題である」と指摘している。(鈴木, 1993)

しかも、臨死体験における光の人格体は非常に寛容であり、グレイも、自分自身の臨死体験のなかでの「光」との遭遇について「私はありのままの状態で光によって完全に愛され、受け入れられていた。受け入れてもらうために自分を正当化したり、努力したりする必要は感じなかったと述べている。(グレイ, 1985)

上記のような「光の人格体」に関してはブラックモアも科学的に説明できなかったようである。その証拠に、彼女は「人格的・超自然的な光の要素は単なる先入観である」と結論付けている。(ブラックモア,1993) ³

(2) 全盲者の臨死体験

第二の問題点としては全盲者の臨死体験が挙げられる。臨死体験においては全盲者も「見る」ことができるという点である。この点に関して、ブラックモアは全盲者の臨死体験事例を徹底的に調べあげたうえで「決定的な証拠と言える事例はひとつもない」と語り、すべてが虚言であるとしている。(ブラックモア,1993)

実際、全盲者が臨死体験において「見た」事実に関する事例には具体性に欠けるものが多い。ただし、ムーディが『光の彼方に』の中で取り上げている話は傾聴に値する。それはロング・アイランドに住む70歳の女性の臨死体験である。

この女性は、18歳のときに失明したにもかかわらず、心臓発作を起こして蘇生処置を受けていた間に周囲に起こっていた出来事を細々と描写することができた。そのとき使われていた器具の形だけではなく、その色についても言い当てた。さらに、彼女は蘇生処置が始められたときに医師が着ていたシャツの色(青色)も言い当てた。(ムーディ,1989)

また、ケネス・リングも『Lessons From The Light (光に学ぶ)』のなかで以下のような事例を報告している。

ヴィッキー(42歳)は未熟児網膜症のために盲目になったが、自動車事故による頭部手術中にさまざまなものを見た。体外離脱した彼女は自分の頭が切り開かれてたくさんの血が流れ出ているのを見たという。しかし、血の色については言えなかった。彼女は色についての概念をもっていなかったからである。それから、彼女は病院の上空を浮遊したが、眼下には

病院の屋根や街の灯が見えたという。そして、その直後にトンネルに吸い込まれて花々でおおわれた輝くばかりの草原に出て、そこですでに亡くなった知人たちに出会った。ところが、彼らに近づこうとすると、とりわけ明るい輝きを発する人物に遮られ、彼女はその人物をイエスだと直観した。そして、イエスから「子どもを生むために戻らなければならない」と告げられた瞬間に彼女は自分の肉体に戻り、再び激痛と重苦しさを感じた。(リング, 1998)

全盲者であるヴィッキーの体験は典型的な臨死体験と基本的に同一であり、彼女はいろいろな情景を見ることができた。しかも、それは通常彼女がみる夢とは違っていた。彼女の夢のなかでは味覚・触覚・聴覚・臭覚等はあるが、色・景色・光等の視覚的なイメージはまったくなかったからである。

そして、リングが1994年から1997年にわたってかなり大掛かりな調査を行った結果でも、31人の盲目の臨死体験者のうち80%が視覚的体験を語っていた。(リング, 1998)

したがって、臨死体験は、この世とはまったく異次元の世界での体験であるとも考えられるが、もちろん、これらの話についても最終的には体験者の証言を信じる以外にはその信憑性を裏付ける手立てはない。しかし、少なくとも、ブラックモアのようにこれらの証言を虚言として一蹴することは科学者の傲慢であるように思える。

(3) 事後効果

最後の問題点は「事後効果」である。

アメリカの臨死体験研究者・アトウォーターは700人の臨死体験者へのインタビューをもとに「約8割の体験者が臨死体験後の人生が大きく変化した」と述べている。その内訳は、人生に大きな変化が生じた人々が60%、以前と同じ生活が不可能なほどに人生が激変した人々が19%であった。(アトウォーター, 1997)

具体的な変化としては「死への恐怖の減少」、「あるがままの受容」、「生きる目的の自覚」、「愛、思いやり、寛容さの増大」、「物質的欲望の減少」、「霊的・精神的ものへの関心の増大」等が挙げられ、ほとんどの場合、臨死体験者はプラスの方向に心理的な変化を起こしていることが指摘されている。

日本人のなかでは鈴木秀子の事後効果が有名である。鈴木は臨死体験後の変化はまず身体面にあらわれた。膠原病がすっかり治癒してしまったのである。さらに、精神的・霊的にも「まるで別次元の境地に達したように」すべてが変化してしまって、鈴木は強力なヒーリング能力（癒しの力）を発揮するようになった。(鈴木, 1993)

たとえばある日、ひとりの少女のからだに手をあてると背骨が曲がっていることがからだにじかに伝わってきた。そこで鈴木が癒しの力をこめて彼女の背骨に手をあてると、突然カクーンという音が響いたのでびっくりして少女の背中を確認してみると、曲がっていたはずの背骨がまっすぐに伸びていた。

それ以来、鈴木は、重症患者のところに赴き、患者たちに手を当てて静かに呼吸を合わせるようになった。そうすると、その人と自分そして宇宙との深い一体感に満たされ、自分の手を通して宇宙の力が病人に伝わってゆくように感じられた。その結果、奇跡的に病の癒える人もいれば、亡くなる人もいたが、亡くなった人も、鈴木が手を当ててそばにいと、自

分の一生を語り、自分が生きてきたことの意味、果たせなかった夢、悔いや感謝、家族への思いなど全てを語り、人生を締めくくって安らかに旅立って行った。(鈴木,1993)

以上のような事後効果が多くの臨死体験者に起こっているのであるが、ブラックモアは事後効果に関しては全く言及していない。事後効果は明らかに科学的範疇を超えた現象であるので、科学的検証の圏外におかれたようである。

5. 「臨死体験」授業におけるVTR教材

筆者の「生命倫理」の授業においては、上述のような臨死体験研究を踏まえながら講義しているが、単に講義するだけでは学生たちに与えるインパクトは弱く、学生たちの問題意識を喚起することも難しい。

そこで、前述したように、筆者はVTR教材を使用している。臨死体験授業におけるVTR教材としては①死後の世界—太田哲也の衝撃体験 ②不思議な宇宙体験—木内鶴彦の転身 ③ジャスティンの臨死体験を使用している。その内容は以下の通りである。

① 太田哲也の臨死体験

「日本一のフェラーリ遣い」と呼ばれていた太田哲也は日本のレーシング界におけるスター選手であったが、1998年、富士スピードウェイでのレース中に車同士の激突事故に遭遇した。ところが、700度以上の高温の車内で火達磨になって断末魔の苦しみに喘ぐ太田の前に「黒いマントの老人」が現れ、体の痛みを取り去ってくれた。そればかりでなく、老人は彼の肩を優しく包み込むようにして、「少し若いけれど君は濃い人生を送った」と言って、彼の人生を高く評価してくれた。その言葉にすっかり気をよくした太田は「自分は死んでいくのだ」と思いながら、老人と一緒に坂を下りていった。死に対する恐怖は皆無であり、むしろ、穏やかな気分であった。

しかし、その時、「太田さーん」「パパー」と自分を呼ぶ声が聞こえたので老人の手を振り払って懸命に坂を駆け上がった。すると、背後から「生きることは辛いことだよ」という老人の声が聞こえたが、彼は必死に生きる方向に進み続け、奇跡的に意識を取り戻した。

その後、太田は懸命な治療によって一命をとりとめたが、彼の顔には眉毛が一本もなく、口は斜めに大きく引きつり、鼻もなくのっぺらぼうのような顔の真ん中に二つの穴が開いているだけだった。

その顔を見た時、太田はレーサーとしての誇りをすべて失ってしまった。これからは「日本一のフェラーリ遣い」などと呼ばれることもない。「醜い化け物」となった自分には誰も近づこうとしないだろう。黒いマントの男が「君は濃い人生を送った」と言った時に自分は死ぬべきだったのだ。「どうして生き返ってしまったのか？」と自問した。どこからともなく、「生きることは辛いことだよ」という声が聞こえてきた。

しかし、そのうち、太田は「人生において辛いことよりも喜びのほうが上回ればいいんだ」という悟りの境地に達することができた。⁴

そして、それからの太田は何か強い力に生かされているという感覚のもとに「生きる意味を人々に伝えることが使命だ」という信念をもって執筆・講演活動およびレーシングチームの立ち上げ等において活躍している。(太田,2001)

②木内鶴彦の臨死体験

航空自衛隊員であった木内鶴彦は典型的な理系人間であり、臨死体験などということは全く信じていなかった。しかし、22歳の時に上腸間膜動脈性十二指腸閉塞という難病に冒された。そして、一度死亡が確認されたが、30分後に蘇生した。これは死後蘇生が医師のカルテに記録されている国内唯一の症例である。

木内は心拍停止中に三途の川やお花畑を見た。その後、病院の廊下に出てみると、母親が親戚に「鶴彦が死んじゃったの」と電話している姿を目撃した。さらに、彼の意識は自分自身の過去や未来にも自由に飛翔することができた。また、幼少時代の自分の姿を見るとともに、寺のような場所で天文に関する講演をしている未来の自分を見た。そして、やがて、再度、自分の体に戻ってきた。⁵

この臨死体験がきっかけとなって、木内は自衛隊を退職して彗星探検家としての道を歩み始め、幻の彗星であるスィフト・タートル彗星発見等の数々の天文学上の偉業を成し遂げた。彼は現在でもアマチュア天文家として活躍しているが、「臨死体験によって彼の才能が一気に開花したのではないか」と言われている。(木内,1995)

③ジャスティンの臨死体験

1991年秋、アメリカ在住のジャスティンは怪我をして腕の手術を受けた際に、担当医が間違えて通常の10倍の麻酔薬を投与したために心停止に陥った。しかし、彼女は痛みや苦しみを感ずることはなく、明るい光に包み込まれて病室の天井付近から自分が蘇生処置をされる光景を眺めていた。すると、その明るい光のなかに、突然、イエスキリストが出現し、彼女に優しく語りかけてきた。そして、彼女はイエスに導かれるようにして他の場所に移動したが、そこには一面のお花畑が広がり、下方には小川が流れていた。川の向こうには亡くなったはずの友人や祖父母たちが見えたが、彼らは口々に「ジャスティン、まだ死ぬのは早いわよ」と言って現世に帰るように説得した。そこで、彼女が再び生きることを決意した瞬間に、ジャスティンは奇跡的に息を吹き返して一命をとりとめた。⁶

6. 「臨死体験」に対する反応

筆者は、臨死体験の授業において3本のVTR教材を活用したのであるが、学生たちの反応は概ね良好であった。とくに、太田の遭遇した壮絶な事故現場にはショックを受けるとともに、炎の燃えさかる車中でも痛みや苦しみを感ずることなく穏やかな気分がマントの男とともに死の世界に歩いていくことができた事実には驚嘆していた。そして、Aさんは以下のような感想文を寄せてきた。

「私は亜急性性リンパ節炎にかかり、連日40度以上の高熱にうなされていたことがありま

す。発熱して3日目に体温計でも測りきれない「H」というマークが出ていた時のことです。いつの間にか薄い紫色のお花畑に私はいました。太田さんと同じでとても居心地がよかったのを覚えています。「ここは天国なのかな？」と思いました。先に進むにつれて本当に温かく、心地がよく、ずっとここにいたいと思えるような場所でした。しかし、後ろのほうから「目をあけて！」という母親の声が聞こえたので、「まだここに来ちゃいけないんだ」と思ったところで目が覚めました。幽霊とか靈感とかは信じない私だったのですが、これを機に「死後の世界があるのかなあ」と思うようになりました。

Aさんは自分自身の臨死体験と太田の臨死体験を重ね合わせたわけであるが、木内の体外離脱体験についても多くの学生が興味を示していた。木内が時間・空間に縛られることなく瞬時に自分の意識する場所に次々と移動する様子や自分の過去の姿・未来の姿を見た点が印象的であるとともに、臨死体験後における彼自身の人生の大転換は紛れもない事実であるだけに強いインパクトを受けたようであった。

しかし、ジャスティンの臨死体験の場合は少し反応が違っていた。お花畑・小川・故人との再会等は基本的には日本人の臨死体験と共通していたので違和感をもたなかったようであるが、「光」に関しては文化の相違を実感していた。なぜなら、ジャスティンの見た「光」は日本人の一般的な臨死体験における「光」とは違った「聖なる光」であったからである。つまり、学生たちは、彼女が光のなかにイエス・キリストを見た点に日米の文化的差異を実感したわけである。さらに、ジャスティンがイエスと会話した点にも戸惑いをみせていた。

日本人も臨死体験において光を見るが、日本人の場合はその光が神仏と結びつくケースは非常に少ない。たとえば、ある日本人女性は、自分自身の体験した「光」について「あの世に行った時、朝日のような、輝くような光に包まれて、体中、ゆったりして、安らかで、つかえていたものがみんな溶けて、幸せそのもので、ここにいつまでもいたいと思いました。あの世は海のようなものですね」と述べている。(鈴木,1997)

この臨死体験に象徴されるように、日本人が体験する「光」には宇宙的色彩が濃い。また、仮に、日本人が神仏のようなものを感じたとしても、それらと会話をすることはない。しかし、キリスト教圏の人々は光のなかに神(イエス)を見る。そして、そこにはイエスとのコミュニケーションがあり、イエスから何らかのメッセージを受け取ったという報告が多い。これについて、立花は、キリスト教における神の人格的要素が臨死体験にも反映されていると指摘している。(立花,1994)

つまり、臨死体験の基本的な内容は同じであっても、「そこで何をどのように見るか」に関しては、それぞれの国の文化や宗教が色濃く反映されているということである。学生たちがジャスティンの臨死体験に違和感をもった理由もその点にあると考えられる。

以上のように、3本のVTR教材を視聴することによって、学生たちはさまざまな思いを抱いたわけであるが、臨死体験そのものを信じるかどうかについて調査してみた結果は以下の通りであった。

臨死体験アンケート(薬学部4年生 回答者数 128名 2012.6.14.実施)

臨死体験を信じる 79名 62%

臨死体験は信じない 28名 22%

どちらでもない 21名 16%

このアンケートは授業終了直後に行ったものであるが、理系人間が圧倒的に多い薬学部生としては「臨死体験を信じる」が想像以上に多い。そして、それは、実際には、単に「臨死体験を信じる」ではなくて「死後の世界を信じる」につながっているように思われる。

実際、筆者の授業を受けた学生たちの感想文のなかにも「臨死体験は単に死後の世界をかいまみただけの体験ではなくて死後の世界そのものではないか」と述べているものが多く見受けられたが、以下に紹介するBさんのレポートもその部類に属する。

「自分自身の最期に関する問題点は「苦痛」と「存在そのものの消失」であった。しかし前者においては、過度な延命治療を施さない限り安らかに死んでいけるらしいことが確認できた。生理的にはエンドルフィンの分泌作用によるものであろう。その点では安心したが、自分自身の存在が無になってしまうことは恐ろしい。空しい。なぜなら「確実に」肉体が減びることによって「空間」が「無」になり、この世での人生が「確実に」終わることによって「時間」も「無」になるからである。しかし、数々の臨死体験について学んでいるなかで、この「確実に」という概念は時空の世界からとらえた限りでの「确实」であることに気づいた。その観点から臨死体験を再検討してみると、自分自身がいかに時空の世界にとらわれていたかということに気づかされた。そして、時空の世界を超越した「魂」についてもっと真剣に考えてみようという気持ちになった。」

Bさんは臨死体験授業を受ける以前の段階で自分が「确实」と思っていたことについて再検討するとともに「魂の世界（死後の世界）」にまで思いをはせるようになったわけである。

おわりに

ネイティヴ・アメリカンの女性を母として生まれたベティ・イーディーの著書『死んで私が体験したこと』において「人間には霊なんてものはない（中略）だから死後のいのちなどないのだと私たちが考えるようになってから、たかが数百年しか経っていない。それ以来、人間は死を不自然に恐れるようになり、死はいのちをむしばむもので、人生を豊かに生きる障害となるものだと考えるようになってしまった。死は霊的な話だということがわかると、私たちは死を願うようになるのではなく、人生をもっと豊かに生きようと思うようになる」と書かれている。（イーディー、1995）

たしかに、ここ数百年における科学技術の発達過程において、人類は「科学」の名のもとに本当に人間にとって大切なものをなおざりにするようになった傾向が強い。その結果、現代人は物質的な豊かさを手にいれた代わりに精神的には貧しくなったともいえよう。

死に対する恐怖も精神的貧困と無関係ではない。数百年前までの人間は「死」を自然の摂理として受容してきたが、現代医学においては「死は敗北」とみなされるようになった。

最近になって「より良き死」について真摯に議論がたたかわされるようになったが、それでも死に対する恐怖そのものが遠のいたわけではない。

人々は自分自身の存在が無になってしまうことに対して耐え難い空しさを覚えているが、死後の世界に対しても疑心暗鬼である。そして、差し当たりは「死」について考えないようにしている。しかし、心の片隅では何らかの形での「永遠性」を願っている面もある。

臨死体験は「死をかいまみた体験」であり、死そのものの体験ではない。しかし、臨死体験を信じることは死後の世界を信じることにもつながっていると考える学生は多い。その傾向は以下のCさんの感想文のなかでも感じられる。

「私は死というものは一人の人間がこの世から消えてしまうことであり、それ以上考えることができなかつた。そして、人生で築きあげてきたものが、死を境に一瞬で無になってしまうことに対しては虚しさを感じていた。しかし、今は臨死体験に強く惹かれている。だからといって「臨死体験は現実体験である」と絶対的に肯定しているわけではない。臨死体験が真実かどうかは死を迎えるまで分からない。しかし、死という肉体の消失は一つの通過点であり、その先に魂を前提とした世界があるならば、以前と比べて生を前向きに捉えることができるような気がする。」

Cさんは臨死体験の学びによって死の恐怖が若干緩和されたようであるが、Cさんも言及しているように、臨死体験が真実かどうかは死を迎えるまで分からない。もちろん、科学的に論証することもできない。

脳科学者の茂木が「臨死体験のような超越的な現象は世界を理屈で理解しようとする人にとっては、一種の不条理として立ち現れてくることになる。なぜならば、臨死体験は、人類がその本質を理解することを拒む、一種の不可解な、しかし否定できない事実として、私たちの前に立ち塞がることになるからだ。」と述べているように臨死体験は科学の対象外の分野に属する体験なのである。(茂木,1998)

しかし、アトウォーターが「15年間、臨死体験研究に専念した結果、私は重要なのは臨死体験そのものではなく、後遺作用と体験者本人がそれにどう対処するかだと確認するに至った」(アトウォーター,1998)と述べているように、そもそも、臨死体験においては、その信憑性よりも臨死体験による事後効果が重要なのである。

自分自身も臨死体験者でもある山折が「臨死体験そのものの真偽よりも、そういうものを見たということが、その人間にとってどういう意味を持つのか。そこところが非常に大事だと思うのです。その人にとってはそれで人生観が変わったり、死の恐怖が薄れたりすれば、それだけで意味があったということになるわけです」と述べている通りである。(山折,1994)

学生たちは実際に臨死体験をしたわけではないが、臨死体験を学ぶことによって間接的な「事後効果」があったように思える。実際、学生たちの授業感想文においても「死後の世界」に関心をもち始めた結果、自分自身の死についてより真摯に対峙しようとする姿勢が窺える。

臨死体験の授業を契機として学生たちの「死」に対する考察がさらに深まることは学生たちの「生」の充実にもつながることであり、その点に臨死体験授業の意義があると考えられる。

<注>

- ¹ 『かいまみた死後の世界』と同年に精神科医のE・キューブラー・ロスも『続・死ぬ瞬間 (Death, The Final Stage of Growth)』(1975)を出版した。終末期患者の心理状態と臨死体験を結びつける点において大きな役割を果たした。
- ² 1981年にはムーディ、ケネス・リング、マイクル・セイボムらを中心として国際臨死研究学会 (IANDS) が結成された。
- ³ 臨死体験における「光」に関しては、キリスト教圏に属する人々の体験と日本人の体験との間には宗教的観点からの相違がある。
- ⁴ 「スーパーテレビ 死後の臨死体験～あるレーサーの衝撃体験」(日本テレビ)にて放映された。(2005.8.8.)
- ⁵ 「スーパーテレビ 死後の臨死体験～不思議な宇宙体験」(日本テレビ)にて放映された。(2005.8.8.)
- ⁶ 「報道ステーション 臨死体験特集～ジャスティンの場合」(テレビ朝日)にて放映された。(2001.11.20.)

<参考文献>

- Elisabeth Kubler-Ross(1975)『Death, The Final Stage of Growth』Prentice-Hall 『続・死ぬ瞬間』(1999) 読売新聞社
- Raymond Moody (1975)『Life after Life』Stackpole Books 『かいまみた死後の世界』(1977) 評論社
- Kenneth Ring (1980) 『Life at Death : a scientific investigation of the near-death experience』 Coward McCann 『いまわのきわに見る死の世界』(1981)講談社
- Kenneth Ring(1998)『Lessons From The Light』Da Capo Press
- Michael B. Sabom(1982)『Recollections of Death』Harpercollins 『「あの世」からの帰還』(2006)日本教文社
- Elisabeth Kubler-Ross (1991)『On Life after Death』Celestial Arts『死後の真実』(1995) 日本教文社
- 立花隆(1994)『臨死体験 上・下』文藝春秋
- Immanuel Kant(1781)『Kritik der reinen Vernunft』『純粹理性批判』(1961) 岩波書店
- Immanuel Kant(1788)『Kritik der praktischen Vernunft』『純粹実践批判』(1978)岩波書店
- Ph.L.Berman(1996) 『The Journey Home』Pocket Books
- Blackmore(1993)『Dying to Live: Near-Death Experiences』Prometheus Books 『生と死の境界』(1976) 読売新聞社
- Melvin Morse (1991)『Closer to the Light: Learning from Children's Near Death Experiences』Souvenir Press Ltd 『臨死体験 光の世界へ』(1997) TBS ブリタニカ

- Raymond Moody(1889) 『The Right Beyond』 Bantam; Reissue 版 『光の彼方に』 (1990)
阪急コミュニケーションズ
- M.Grey(1985) 『Return from Death』 Arkana, London,
- W.Buhlman(2001) 『The Secret of the Soul』 Harper San Francisco
- P. M. H. Atwater(1997) 『Beyond the Light』 Avon Books (Mm) 『光の彼方へ』 角川春樹
事務所
- Betty J. Eadie (1995) 『Beyond the Darkness』 Simon & Schuster Ltd 『死んで私が体験し
たこと』 同朋舎出版
- 鈴木秀子(1993) 『死にゆく者からの言葉』 文藝春秋
- 鈴木秀子 1997) 『生の幸い、命の煌き』 中央公論社
- C.G.ユング/河合隼雄訳(1972) 『ユング自伝—思い出・夢・思想』 みすず書房
- カール・ベッカー(2000) 『生と死のケアを考える』 法藏館
- 石井登(2002) 『臨死体験研究読本』 アルファポリス
- 太田哲也(2001) 『クラッシュ—絶望を希望に変える瞬間(とき)』 幻冬舎
- 木内鶴彦(1995) 『宇宙(そら)の記憶—彗星探索家の臨死体験』 竜鳳書房
- 山折哲雄(1994) 「臨死体験と宗教」 立花隆 『生、死、神秘体験—立花隆対話篇』 書籍情報社
- 茂木健一郎(1998) 『生きて死ぬ私—脳科学者が見つけた「人間存在」のミステリー』 徳間書
店
- 小松奈美子(2003) 『統合医療の扉』 北樹出版
- 小松奈美子(2005) 『医療倫理の扉』 北樹出版
- 斎藤忠資(2003) 『時間と空間の分離を超える意識—臨死体験に関する一考察—』 広島大学総
合科学部紀要 III 人間文化研究 Vol. 12
- 小松奈美子(1997) 『臨死体験—時空を超えた世界をめぐって』 Quality Nursing Vol.3 No.5
- 小松奈美子(2012) 『ある宗教学者の生と死—岸本英夫の生死観』 The Basis 武蔵野大学教養
教育リサーチセンター紀要 第2号
- 斎藤忠資(2005) 『すべてのものを包む光：無条件の受容—臨死体験の光に関する一考察—』
青山学院大学同窓会キリスト教学会 『基督教論集』 第49号
- 馬場俊彦(1998) 『臨死体験による人格変容—回心体験との比較において』 名城大学人文紀要
34(2) 名城大学人文研究会